

令和3年度

一般入学試験A日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～21ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園大学 発達教育学部

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

見える人と見えない人の空間把握の違いは、単語の意味の理解の仕方にもあらわれてきます。空間の問題が単語の意味にかかわる、というのは意外かもしれませぬ。けれども、見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです。

たとえば「富士山」。これは難波さんがアシテキした例です。見えない人にとって富士山は、「上がちよつと欠けた円すい形」をしています。いや、実際に富士山は上がちよつと欠けた円すい形をしているわけですが、見える人はたいいていそのようにとらえていないはずです。

見える人にとって、富士山とはまずもって「八の字の末広がり」です。つまり「上が欠けた円すい形」ではなく「上が欠けた三角形」としてイメージしている。平面的なのです。月のような天体についても同様です。見えない人にとって月とはボールのような球体です。では、見える人はどうでしょう。「まんまる」で「盆のような」月、つまり厚みのない円形をイメージするのではないでしょうか。

三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです。「奥行きのあるもの」を「平面イメージ」に変換してしまふ。とくに、富士山や月のようにあまりに遠くにあるものや、あまりに巨大なものを見るとときには、どうしても立体感が失われてしまいます。もちろん、富士山や月が実際に薄っぺらいわけではないことを私たちは知っています。けれども視覚がとらえる二次元的なイメージが勝ってしまう。このように視覚にはそもそも対象を平面化する傾向があるのですが、重要なのは、こうした平面性が、絵画やイラストが提供するA文化的なイメージによってさらに補強されていくことです。

私たちが現実の物を見る見方がいかに文化的なイメージに染められているかは、たとえば木星を思い描いてみれば分かります。木星と言われると、多くの人はあのマープリングのような横縞よこしまの入った茶色い天体写真を思い浮かべるでしょう。あの縞模様しまりょうの効果もありますが、木星はかなり三次元的にとらえられているのではないのでしょうか。それに比べると月はあまりに平べったい。満ち欠けするという性質も平面的な印象を強めるのに一役買っているようですが、なぜ月だけがここまで二次元的なのでしょう。

その理由は、言うまでもなく、子どものころに読んでもらった絵本やさまざまなイラスト、あるいは浮世絵や絵画の中で、私たちがさまざまな「まあるい月」を目にしてきたからでしょう。紺色の夜空にしつとりと浮かびあがる大きくて優しい黄色の丸——月を描くのにはふさわしい姿とは、およそこうしたものでしょう。

こうした月を描くときのパターン、つまり文化的にイジヨウセイされた月のイメージが、現実の月を見る見方をつくっているのです。私たちは、まっさらな目で対象を見るわけではありません。「過去に見たもの」を使って目の前の対象を見るのです。

富士山についても同様です。風呂屋の絵に始まって、種々のカレンダーや絵本で、デフォルメされた「八の字」を目にしてきました。そして何より富士山も満月も縁起物です。その福々しい印象とあいまって、「まんまる」や「八の字」のイメージはますます強化されています。

見えない人、とくに先天的に見えない人は、目の前にある物を視覚でとらえないだけでなく、私たちの文化を構成する視覚イメージをもとらえることがありません。

B

人が物を見るときにおのずとそれを通してとらえてしまう、文化的なフィルターから自由なのです。

つまり、

C

人は、

D

人よりも、物が実際にそうであるように理解していることになります。模型を使って理解していることも大きいでしょう。その理解は、概念的、と言ってもいいかもしれませんが。直接触ることのできないものについては、辞書に書いてある記述を覚えるように、対象を理解しているのです。

定義通りに理解している、という点で興味深いのは、見えない人の色彩の理解です。

個人差がありますが、物を見た経験を持たない全盲の人でも、「色」の概念を理解していることがあります。「私の好きな色は青」なんて言われるとかなりびっくりしてしまうのですが、聞いてみると、その色をしているものの集合を覚えることで、色の概念を獲得するらしい。たとえば赤は「りんご」「いちご」「トマト」「くちびる」が属していて「あたたかい気持ちになる色」、黄色は「バナナ」「踏切」「卵」が属していて「黒と組み合わせると警告を意味する色」といった具合です。

ただ面白いのは、私が聞いたその人は、どうしても「混色」が理解できないと言っていたことでした。絵の具が混ざるところを目で見たことがある人なら、色は混ぜると別の色になる、ということを知っています。赤と黄色を混ぜると、中間色

のオレンジ色ができあがることを知っています。ところが、その全盲の人にとっては、色を混ぜるのは、机と椅子を混ぜるような感じで、どうも納得がいかないそうです。赤＋黄色＝オレンジという法則は分かってても、感覚的にはどうも理解できないのだそうです。

もう一度、富士山と月の例に戻りましょう。見える人は三次元のを二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままにとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中でとらえている。

だとすると、そもそもE空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、厳密な意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、空間を空間として理解することができないのではないか。

なぜそう思えるかというと、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。もちろん、実際にその場所に立っている必要は必ずしもありません。絵画や写真を見る場合は、画家やカメラが立っていた場所の視点を、その場所ではないところにいながらにして獲得します。顕微鏡写真や望遠鏡写真も含めれば、肉眼では見ることのできない視点に立つことすらできます。想像の中でその場所に立つような場合も含め、どこから空間や物をまなざしているか、その点が「視点」と呼ばれます。

同じ空間でも、視点によって見え方が全く異なります。同じ部屋でも上座から見たのと下座から見たのでは見えるものが正反対ですし、はたまたノミの視点で床から見たり、ハエの視点で天井から見下ろしたのでは全く違う風景が広がっているはずです。けれども、私たちが体を持っているかぎり、一度に複数の視点を持つことはできません。

このことを考えれば、目が見えるものしか見ていないことを、つまり空間をそれが実際にそうであるとおりに三次元的にとらえ得ないことは明らかです。それはあくまで「私の視点から見た空間」でしかありません。

ひとつ例をあげましょう。広瀬浩二郎さんがよくあげる例です。

広瀬さんの職場、国立民族学博物館は、大阪の万博記念公園の中にあります。一九七〇年に空前の人気を集めたあの大阪万博の会場となった場所で、現在は広大な敷地面積を誇る公園として整備されています。国立民族学博物館はその一角、かつて万博のメイン会場だった「お祭り広場」があった場所の向かって左手奥あたりにあります。

さて万博のシンボルといえば、何と言っても岡本太郎作の「太陽の塔」です。もともと、「万博のシンボル」といつても、太郎自身は万博の進歩思想にウカイギ的で、その証拠に丹下健三デザインの「大屋根」を突き破って天にのびるといふ丹下にとつては屈辱的なデザインを提案しました。つまりどちらかというと太陽の塔は「反万博のシンボル」であったわけですが、しかし大屋根も一部を除いて現存しない今となつては、大地にそびえ立つその雄姿こそ「万博公園の主」と呼ぶにふさわしい堂々たるものです。

広瀬さんは言います。「太陽の塔に顔がいくつあるか知っていますか」。そうすると、見える人の多くが同じ答えを返すと言います。曰く「二つ」であると。なるほど、確かにてっぺんに「金色の小さな顔」と胴体の中央に「大きな顔」が見えます。

でも実際には、太陽の塔には三つの顔があります。先の二つに加えて、背中側にも「黒い太陽」と呼ばれるちよつと不気味な顔がある。さきほどの月や富士山の例と似ていますが、見える人にとつては万博公園入り口方向から見たあの姿こそ、太陽の塔の姿とされている。その視点に縛られてしまうので、裏側の顔のことは気づかないのです。

「アウト・オブ・サイト、アウト・オブ・マインド」なんていう言い方がありますが、視界に入らないことは、軽んじられ、忘れられることを意味します。しかも、見える人にとつては顔は正面にあるものと相場が決まっています。まさか背中側にも顔があるとは思いません。

模型で太陽の塔を理解している視覚障害者の場合、こうした「エゴニン」は起きにくいと広瀬さんは言います。模型の場合は、すべての面をまんべんなく触ることができず。だから特定の視点に縛られることがない。腕が生えているあたりの太さや、首の傾き具合を含めて、まさに太陽の塔そのままに、立体的にとらえているわけです。

F、見えない人には「死角」がないのです。これに対して見える人は、見ようとする限り、必ず見えない場所が生まれてしまう。そして見えない死角になっている場所については「たぶんこうなっているんだろう」という想像によって補足するしかない。

G、見えない人というのは、そもそも見えないわけですから、「見ようとするで見えない場所が生まれる」という逆説から自由なのです。視覚がないから死角がない。 (注) 大岡「山」の例でも感じた、自分の立ち位置にとらわれない、

オフカンので抽象的なとらえ方です。見えない人は、物事のあり方を、「自分にとってどう見えるか」ではなく「諸部分の関係が客観的にどうなっているか」によって把握しようとする。この客観性こそ、見えない人特有の三次元的な理解を可能にしているものでしょう。

H 負け惜しみを言うわけではありませんが、見えないからこそ想像力が働く、なんていう場合もあります。ですから死角も完全に悪者だとは言えません。月の裏側に秘密基地がある、なんていうSF的な設定は、見えない人にとっては共有できない感覚でしょう。「見えないもの」とつきあっているのは、実は見える人の方なのかもしれません。

(伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』より)

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

注 筆者が協力者の一人と大岡山駅の改札で待ち合わせ、一緒に交差点を渡ってすぐの大学正門に入り、筆者の研究室まで緩やかな坂道を下って

いたときに、いつもはただの坂道としか思っていなかった道順の一部を、その人が「大岡山は、やっぱり『山』なんですわね」と言ったこと。

問1 ア～オのカタカナで示した語の傍線部分と同じ漢字を含むものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア シ|テ|キ

- 1 テキセイな評価
- 2 病院でテンテキを受ける
- 3 テキグンを攻撃する
- 4 不正のテキシュツ

イ ジョウ|セ|イ

- 1 日本酒のジョウゾウ会社
- 2 腕がジョウタツする
- 3 ジョウキョウが悪化する
- 4 カンジョウを払う

ウ カイ|ギ

- 1 首相の記者カイケン
- 2 母校のカイコウ記念日
- 3 家屋がゼンカイする
- 4 巧みなカイジュウ策

エ ゴ|ニン

- 1 ゴカクに渡り合う
- 2 重大なカゴを犯す
- 3 ゴバンの目のような町並み
- 4 老舗のゴフク店

オ フ|カン

- 1 ファイの来客
- 2 補助金のコウフ
- 3 ひれふすことをフクという
- 4 ごくフツウの成績

問2 傍線部A「文化的なイメージ」の説明として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 それまでに見たり読んだり体験したりしたことをもとにして、自分の中に作り上げた印象。
- 2 人間の視覚に本来的に備わっている、対象を平面化して見ようとする傾向にもとづく印象。
- 3 三次元を二次元化するのは進化の過程で築き上げた視覚の特長で、対象を平面化する見方。
- 4 それまでに学んできた辞書的な知識で説明できる理解によって、現実を見ようとする見方。

問3 空欄BとDに文脈に合うように言葉を入れるときに、その組み合わせとして最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| 1 | B | 見えない | C | 見える | D | 見えない |
| 2 | B | 見えない | C | 見えない | D | 見える |
| 3 | B | 見える | C | 見える | D | 見えない |
| 4 | B | 見える | C | 見えない | D | 見える |

問4 傍線部E「空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか」と筆者が考える理由として最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- 1 見える人は一度に複数の視点を持つことができないので、実際どおりにしか見ることはできないから。
- 2 見える人は一度に複数の視点を持つことができないので、目が見るものしか見ることはできないから。
- 3 見えない人は二次元的なイメージを持っていないので、空間を実際にあるようには理解できないから。
- 4 見えない人は二次元的なイメージを持つことができるので、空間の三次元的な理解が可能であるから。

問5 空欄F・Gに文脈に合うように接続の語を入れるときに、その組み合わせとして最も適するものを、次の1〜4の中から一つ選びなさい。

- | | | | | |
|---|---|------|---|------|
| 1 | F | さて | G | ところで |
| 2 | F | ところで | G | だから |
| 3 | F | 要するに | G | しかし |
| 4 | F | しかし | G | 要するに |

問6 傍線部H「負け惜しみを言うわけではありません」とありますが、筆者はどのよう^いな^う人^がどのよう^いな^う人^にどのよう^いな^うな^りで劣^るつて^いる^かと考^えて^いる^ので^すか。必^ず傍^点の^要素^を含^めて、本^文中^の語^句を^使つ^て五^十字^以内^で答^えな^さい。

第二問 次の文章を読んで、次の問い（問1〜6）に答えなさい。

私の肩書はノンフィクション作家ということになっている。いくつかのノンフィクション作品を手掛けているうちにそうなってしまったのだが、実をいうと本人はこの呼称をあまり気に入っていない。

ある時期、ジャーナリストと呼ばれたことがあった。片仮名名めいを使う職業には、どこかア浮薄な感じがある。できるなら日本語の方がいい。

ご存じかと思うが、かつて私は新聞社の社会部記者であった。本人としては新聞社を辞めて長い年月が経たいまも、変わりなく社会部記者をやっているつもりである。

しかし、組織を離れた私が、その呼称で通そうとしても、世間的には通用しない。それで、寄稿先の編集部にお任せして、適当につけてもらっていた。評論家と呼ばれていた時期もある。

私が独立したころ、ノンフィクションという呼称自体が一般的ではなかった。正体の定かでない書き手がやっつけた安手な事件物、といった種類の作品が、ノンフィクションの名で、分厚い倶楽部雑誌の「増量剤」に使われたりしていた。

それらは新聞記事を下敷きに、想像力を交えて、ふくらましカをかけたいい加減なイ代物で、書き手独自の取材の痕跡はなく、ノンフィクションというには程遠い。せいぜいいても、まがい物だったのである。

作品の実体がそういうふうでは、ノンフィクション作家が育つ道理がない。その状況の中で、ルポライターを名乗る一群が登場する。これらの人びとは、業界紙とか小さな出版社とかから転じたケースが多く、主として週刊誌ジャーナリズムを舞台に活躍を始めた。

ルポライターというのは、そのころにできたまったく新しい和製英語である。今日、これを名乗る書き手は少なくなってきたが、当時、雑誌系の書き手は大半がそうであった。

「ノンフィクションの時代」と呼ばれるものが到来するのは、昭和五十年代に入ってからである。昭和四十年代後半から五十年代初頭にかけて、Bこつこつとめいめいの坑道を掘るようになって作品を手掛けていた数人がいる。彼らが鉅脈を掘り

当てた。その鉱脈が本来の意味でのノンフィクションであった。

立花隆、柳田邦男、沢木耕太郎、澤地久枝、上前淳一郎それに私といったいわゆる第一世代は、沢木氏を例外にして、みな大手メディアの出身であった。立花氏は文藝春秋、柳田氏はNHK、澤地氏は中央公論、上前氏は朝日新聞、私は読売新聞に籍を置き、組織の中で力をつけてから新しい可能性を求めて巣立っていった、一種の冒険者であった。

その時期、生え抜きのフリーの書き手が見当らなかつたのは、前記の人たちが名の通つたメディアで「社員」として身分を守られ、その養分を摂取しながら育つていったのにくらべ、フリーで生きるには社会的にも経済的にも、劣悪な環境しか与えられていなかったという事情がある。

ノンフィクションをやるうとすれば、いったん生活^ウを断念しなければならぬ、といわれた時代であった。いまの道に入つて、私が初めて手にした原稿料は、たしか一枚七百円だつたと記憶している。フリーははなから人間扱いされていなかったのである。

これでは、すぐれた人材が集まるわけがなく、育つていく条件もほぼ皆無であった。ノンフィクション前史の時代を振り返ると、死屍累々といった光景が浮かび上がってくる。

新しく登場した書き手たちは、総合月刊誌を主舞台に、取材に時間をかけた本格的な作品を発表していった。そして、それが単行本化される。一点あたりの部数は知れたものだったが、徐々に読者層が広がり、「ノンフィクションの時代」が出版社の掛け声だけでなく、現実^ウに到来するのである。ノンフィクション作家の呼び名が定着するのはそれ以降である。

ルポライターの一群から頭角を現して、今日、確固たる地位を築いている一人に鎌田慧氏がいる。氏はノンフィクション作家を名乗らない。考えがあつたことであろう。ノンフィクションを語る場合、どうしてもはずせない書き手なので、「別格」としてお名前を挙げさせていただいた。

ちよつと横道に入りすぎたようなので、話を戻そう。私はとくだん肩書にこだわっているのではない。無責任に言えば、そんなものはどうだっていいのである。

私は新聞社を辞めたあとも、社会部記者のつもりでやってきた。それがいいだけである。

ここから先は、「いい気なもんだ」という^ウ反発を受けるに違いないが、私の人生もそろそろ終わりにきているので、イ

夕チのなんとかでは無いが、少々いい気になってみたいと思う。

たいそうにいうほどのことではないが、私は社会部記者であり続けることに、誇りを持っている。では、私がいう社会部記者とはどういうものか。おいおい語っていくつもりだが、ここでは一つだけ私が見たいへん気に入っている記事の話をしてみたい。

私が「三等遊軍」をやっていたころ、朝日の社会部に門田勲という大記者がおられた。私はそのお顔も拝見したことさえ無いのだが、戦前からの新聞人で、古巣の社会部に戻られたのは、朝日の大阪本社の編集局長を務められたあとだったと記憶する。

社内での身分が何であったかは知らないが、私たち外野での理解は、この編集局長経験者が社会部に「平記者」として復帰したという、新聞界の先頭に行く朝日ならではの思い切った人事であった。

漏れ聞くとところによると、門田氏はかねてから社主家の村山於藤おむすさんと折り合いがわるく、エレベーターの中で鉢合わせしても挨拶さえしなかったという。そうした事情が、この人事の背景にあったと思われるが、社会部行きを希望されたのはご本人であった、と聞いている。Dうれしいじゃありませんか。

つとに名作家として知られていた門田氏は、現場に戻ってそれこそ水を得た魚のように、縦横に筆を揮ふるわれた。お書きになったものは、E紀行文が多く、次にG紹介するのはその一つである。

古いことなので細部の記憶はあいまいになっており、記述に間違いがあるかも知れない。その場合は、どうかお許し願いたい。

浜名湖の周辺だったと思うが、江戸期から続く蒲焼の老舗があり、門田氏はこの店を訪れる。お相手をするのはこの道ウシ十年の、七代目だか八代目だかに当たる主あまである。

うなぎは開き三年、刺し七年とかいって、焼くようになるまでには、長い修業を積まなければならない。だが、もっと年季がかかるのが焼きで、主にいわせれば焼き一生であるという。

彼の手の指は、やけどでひつつれ、内側に折れ曲ったまま伸びなくなっている。長年、備長炭の熱に焙られて変形してしまっただのである。それだけ年季を入れていても、満足に仕上がるのは一日にせいぜい一串か二串なのだそうである。

蒲焼と一口にいても奥が深いものなんだ、とは思わせるが、料理人の自慢話の定型にやや過ぎたきらいがないでもない。だが、なぜか、皮肉が持ち味の門田氏は、その片鱗さえみせず、淡々と主の語りを追う。それでいて飽きさせないのは、さすがというべきか。

ところが、文章は終わりにきて、突如、冴えを發揮する。

「ところで先生、どういふところを差し上げましょうか」

と向き直る主に、門田氏のひとこと。

「何でもいいから、なるべく能書のつかないところをくれ」

文章はそれで締めである。すかつとしませんか。このあたりがいかにも社会部記者なんだなあ。権威とか権力とかに、おいそれとは恐れ入らない。そんなことは恥ずかしいと心得ている。社会部記者気質の一端がそこにのぞいている。

たった一本の記事が、読む人の人生観に大きな影響を与えることだってある。「門田勲」になりたい。私は心底そう思った。編集局長のポストに就くなどは、将来の夢として眼中になかったのである。

のちに書くが、読売には私一人の力ではどうにもならない事情があつて、私は真正銘の平記者のまま社を去った。でも、心の持ちようとしては、変わりなく社会部記者として生きてきたつもりである。

(本田靖春『我、拗ね者として生涯を閉ず(上)』より)

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～エと意味が最も類似した言葉を選び、漢字で書きなさい。

ア

- 1 ムボウ
- 2 モウソウ
- 3 ケイハク
- 4 ケイキョ

イ

- 1 ソシナ
- 2 シナモノ
- 3 ニセモノ
- 4 ダイヨウヒン

ウ

- 1 コウギ
- 2 ケイベツ
- 3 トウロン
- 4 ハイハン

エ

- 1 タイケンダン
- 2 ドウチュウキ
- 3 シュキ
- 4 ビボウロク

問2 傍線部A「ふくらまし」と類似した意味で使われている言葉を本文中から抜き出ささい。

問3 傍線部B「こつこつとめいめいの坑道を掘る」とはどのような意味か。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 新聞記事をもとに想像すること。
- 2 独自の取材に時間をかけること。
- 3 目立たないで原稿を書くこと。
- 4 冒険心で新たな世界に出ること。

問4 傍線部C「生活を断念しなければならぬ」とはどのような意味か。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 ノンフィクションでは苦勞が絶えず、生活どころではない。
- 2 ノンフィクションに全精力を傾けなければならない。
- 3 ノンフィクションで得られる収入は微々たるものである。
- 4 ノンフィクションをやってもすぐれた人材と見なされない。

問5 傍線部D「うれしいじゃありませんか」という気持ちはなぜ生まれてきたのか。それを説明した文として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 門田氏が社主家と安易に妥協せず、低い地位に甘んじたこと。
- 2 門田氏に限らず、人の希望がかなうことはよいこと。
- 3 門田氏が責任を負わなくても良い気軽な地位につけたこと。
- 4 門田氏が自分の生き方を貫くために地位の低い平社員になったこと。

問6 この文章から読み取れる、著者が目指す生き方について、三十字以内で書きなさい。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えなさい。

世界の人々が抱えている水問題とは、具体的には何なのだろうか。

水問題と聞いて真っ先に頭に浮かぶのは、飲み水がなく、喉が渇き、場合によっては死んでしまうという恐れだろう。しかし、恒常的に水が得られない地域にはそもそも人は居住しない。飲み水だけであれば一人一日二～三リットルもあれば十分であるが、炊事や入浴、トイレや洗濯などの生活用水に、日本だとその一〇〇倍もの水を利用しているし、水供給が十分ではない国や地域でも毎日数十リットルの生活用水を利用している。また、発電所などでの冷却水も含めると、先進国では生活用水と同等か、その数倍もの水が工業用に使われている。さらに、われわれが毎日食べる食料の栽培や生育には、雨水を含めて一人一日あたり二〇〇〇～三〇〇〇リットルもの水が利用されている。

つまり、飲み水が足りなくなるのは、本当に困窮した非常事態であり、山や海で遭難した場合や大規模な自然災害によって供給が滞った場合などに限られる。

では、なぜ飲み水が問題とされるのだろうか。

それは、飲み水の問題が、開発から取り残されて、なかなかその状態から^A抜け出せない状態の象徴だからである。そして、汚染される可能性があり、人間の飲用には本来適さない水しか利用できない人たちが、世界にはまだまだたくさんいる。世界保健機構と国連児童基金による共同モニタリング計画の二〇一五年版報告書によれば、汚染されないように改善された水源からの飲用水を使っていない人々が世界にはまだ六億六三〇〇万人もいて、その約四分の一に相当する一億五九〇〇万人は川や湖などの表流水をいまだに直接飲んでいいる。また、さまざまな原因で亡くなる毎年五九〇万人の五歳未満の乳幼児のうち、三四万人が劣悪な衛生環境や安全ではない飲み水に関連した下痢によって亡くなっている。

しかし、かなり水質が悪くても、最新の技術を用いれば水道水質基準を満たす水にまで浄化可能である。あるいは、地下水が清浄であれば、パイプ式の井戸で汲み上げるだけで飲用に適した水が得られる地域もある。それなのに安全な飲み水が得られないのは、水資源を確保し、安定供給するのに必要な井戸や堰などの取水施設、もしくは貯留施設などの社会基盤（インフラ）施設の整備が不十分な上に、水を浄化して配る仕組みがない、あるいはうまく機能していないからである。すなわ

ち、沙漠のような乾燥地だから水が得られないのではなく、貧困や無政府状態、コミュニティの力量不足、水供給システムの不適切なマネジメントなどのために安全な飲み水を利用できないのである。

安全な水を手軽に利用できない場合には、遠くどこまでも水汲みに出かけてなんとか水を確保するか、健康リスクを冒してでも身近だが安全とは限らない水を飲むしかない。

水汲みは重労働である。一人一日あたり必要な最低限の水の量は二〇〇〜三〇〇リットルであるが、一度にそれだけしか運べないと、毎日家族の人数分往復しなければならぬ。

定義は必ずしも統一されてこなかったが、例えば家から一キロメートル以上歩かないと（一人一日あたり最低二〇リットルの安全な）飲み水を得られない、というのが「安全な水へのアクセスがない」という用語の目安なので、そういう人々は水汲みだけのために毎日何時間も費やさざるをえないのである。本来であれば家事労働や家庭内外でのより生産性の高い労働にあてられるべき時間が、生存を維持するためだけの水汲みに費やされるのは大きな経済的損失である。水汲み労働は女性の仕事である場合が世界的に多いが、子どもが手伝っている場合には教育を受ける機会が失われ、人的資本の形成に大きな損失がもたらされる。

つまり、喉が渇いたり健康を害したりして死にそうになるから、というよりは、時間が奪われ、労働や教育の機会損失によって社会経済的な開発が阻害されるのが、水汲み労働の本質的な問題なのである。

人は水さえあれば生きていけるといっわけではなく、食料や衣服、住居もなくてはならない。車や船などの移動手段や、物流とそれを支える道路・水路・港湾・空港、電気やガスなどのエネルギー供給、教育や医療、現代では携帯電話やインターネットなどの通信、それに金融決済手段も必須である。それなのに水問題がしばしば中心的に取り上げられるのは、水が十分に利用できない地域では、こうした社会の基盤的サービス全般が不十分な場合が多いからである。すなわち、「水」はあるべき社会基盤サービスの象徴なのである。

そして、水分野への支援は、足りない水を補給するというよりは、水不足による健康損失や水汲み労働時間の損失を軽減し、人的資本形成を促し、開発を支えて貧困の悪循環を好循環に逆転させる「D呼び水」としての役割を担っている。

二〇一四年の「水のグローバル解析および衛生および飲料水の評価」（国連水関連機関調整委員会の報告書）によれば、二

○一二年時点でも、改善された衛生施設（トイレ）を二五億人が使えずにいて、一〇億人が屋外で排便しており、一八億人が糞便で汚染された水源から飲み水を得ている状況で、手を洗う際に何億人も人が水や石鹼を使わずにいる。

せっかく安定して水を供給するシステムが構築できたとしても、汚染されてしまうと健康リスクを削減できないので、安全な飲み水の供給と

E

とは一体的に推し進める必要がある。

世界各国を比較すると、各人が大量の生活用水を利用しているような国では乳児の死亡率は低い。日本でも、水道普及率が向上するにつれて、コレラなど水系消化器系伝染病の患者数や乳児の死亡率は劇的に下がった。水道普及率が二〇パーセント程度であった一九二二（大正一〇）年には一〇〇〇人中一九〇人前後、なんと約二割の乳児が一歳になるまでに死亡していたのに対し、水道普及率が九八パーセント近くになった二〇一四（平成二六）年には、乳児の死亡率は一〇〇〇人中約二人にまで下がっている。

しかし、二一世紀を迎えた現在でも、中には一〇〇〇人中一〇〇人以上の子どもが一歳になる前に命を落としている国がある。そういう乳児の死亡率が高い国では、一人一日数十リットルしか生活用水を利用できていない。

実際には社会の開発が水供給や下水道整備など衛生環境の向上と医療水準の上昇をもたらし、総体として乳児の死亡率を下げたと理解するのが妥当であるが、どのくらい水を使っているかは総合的な生活福祉水準を示す良い指標になる。水は文化のバロメータと呼ばれる所以である。

（沖 大幹『水の未来』より）

* 出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部A「抜け出せない状態の象徴」とあるが、何の象徴なのか、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 河や湖などの表流水を飲んでいる人が、まだまだたくさんいるという状態の象徴。
- 2 乾燥地帯等劣悪な衛生環境や安全ではない飲み水の存在があるという状態の象徴。
- 3 社会全体を向上させるには水の確保が必要だがそれができていないという状態の象徴。
- 4 子どもや女性が遠くまで水汲みをするために、苦勞しているという状態の象徴。

問2 傍線部B「不適切なマネジメント」とあるが、文章の意味から考えて、この説明として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 乾燥地であっても、水を確保することは可能だが、お金の問題で施設を作れない。
- 2 劣悪な環境の中において、様々な施設を造っていくための人材を育成できない。
- 3 施設を造るためにも、水の確保が必要だが、その水の確保ができていない。
- 4 安定的に水を確保するための仕組みを作っていく社会が形成されていない。

問3 傍線部C「人的資本の形成に大きな損失がもたらされる」のはなぜだろうか。文章の意味から考えて、その理由として、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 水汲みにかかる時間があまりにも多すぎ、他の場所で働いて収入を得ることができないから。
- 2 水汲みにより教育を受けられず、より良い社会を築くための知識を得ることができないから。
- 3 水汲みにも女性が携わっているため、有能な女性であっても、社会進出が果たせないから。
- 4 水汲みに多くの人が頼らざるを得ない地域には、時間的制約により産業が生まれにくいから。

問4 傍線部D「呼び水」の説明として、最も不適切なものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 最新の技術で水を浄化したり取水施設貯留施設などの社会基盤を整備する資金。
- 2 水の供給は、健康損失や水汲み労働時間を軽減し、人が働く環境を整える。
- 3 人々が安心して、社会の基盤的サービスを整備していくための水の確保と供給。
- 4 水の供給は、家庭内での生産性の高い労働を支え、教育を受ける時間を確保。

問5 空欄Eに入る語句として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 労働環境整備と教育の充実
- 2 改善された衛生施設の整備
- 3 女性の労働や子どもの教育
- 4 経済的社会的な基礎的サービス

問6 本文を読んだ三人の学生が、水問題に対して意見を述べた。あなたはどの人の意見に賛同するか。誰の意見に賛同したかを述べた後、なぜそう考えたのか、あなたの考えを一〇〇字～一五〇字以内で書きなさい。

Aさん 「水問題を解消するためには、ユニセフ等の国際的な機関が積極的にこの問題を扱い、先進国や技術を持っていく国を動かしていく必要がある」

Bさん 「教育の問題を解決していくべきだと思う。今は、ネット環境も整ってきているので、水に対する認識を深めてもらい、自国の水問題を考えていけるようにしていくことが将来を見据えた考え方だと思う」

Cさん 「水問題を抱えている国と交流を持ち、その国に合った技術を一緒に考えていき、恒常的にその国の人がその技術で水を確保できるようにしていけば良いだろう」